

T先生

大森 海太

高校の先輩でペンクラブの元会員の浜田さんから、同校の元女性教師T先生の言行を記した小冊子をお借りした。これは晩年交流のあった教え子の某女史が、最近一冊にまとめたものだが、先生独自のスタンスが随所にこじみ出て興味深かつた。

先生は明治四十年新潟で生まれ、地元の女学校から東京に出て津田塾大学を卒業、結婚して一男を設けたのだが、姑がたいへん厳しい人で、そのもとで終日苦手な家事、裁縫をしなければならなかつたのは、地獄の日々だつたとか。

終戦直後姑は没し夫は頼りなく、苦しい生活の中で運よく私の卒業した高校の英語教師の職をゲットした。ところが初めて登校した日、主任の英語教師が目の前で、女性でも務まるのかと懸念を口にした。

「この人は敬虔なクリスチヤンだったそうだが、クリスチヤンにもいろいろある。だいたい宗教を持つていてるからといって善い人とばかりとは限らない。本当は自己愛の利己主義者で、神様にすがれば天国に行けるなどと信じて居るのかも知れないが、そんなものありやしない」

先生はこんな調子でズケズケおっしゃるのだが、言われてみると妙にナルホドという気がしてくるのが面白い。

その後の学校群制度の導入や学園紛争などもあつて昭和四十五年、六十三歳で退職、翻訳のアルバイトなどをされ、高齢になつてからも元気にされていた。

「自分は老人たちとの世間話が嫌いで、老人ホームに入ろうなどとは思わない。

女性のたしなみとしての編み物、お茶、お花、何もできない。茶会に行くのに着物に気をつかい、飲み方にも諸々の決まりがあるなんて邪道だ。お茶なんて心ゆくまま気楽に飲んだらいいのだ」

これまた率直なご意見で、そうだそつだと言いたくなる。

実は在学中、T先生が居られたことは記憶にあるが、教えていただいたことはない。しかしいま読ませていただくと、私自身のトシも先生の晩年に近くなつたせいか、共感するところが多い。直接お話しする機会がなかつたことは残念である。